# 14［評論］『脳と仮想』

［１］　私個人の人生を振り返って見ると、「他者の心は絶対不可視である」という命題の切実さをしみじみ感じ、そのことを前提にして世界のことを考えようと強くａドウキ付けられたのは、つい最近のことであるように思う。

［２］　自分の子供が小学校一年生になった時、ふと、「自分が子供の頃、自分が学校で体験している内面生活は、親もそれをだいたいにおいては把握しているように思っていたけれども、実は、何も判っていなかったんだ」と思った。それは、自分の子供の通っている小学校の横を歩いている時に、ふとわき上がってきたｂカンガイだった。自分がどれくらい子供の小学校での内面生活を把握しているかと考えれば、自分の親から自分の小学校時代の内面生活を見ても、①同じことだったのだとすぐに判る。そんなに簡単なことがなぜ判らないのかとも思うが、気がつけば簡単なことほど判らないのではないかとも思う。

［３］　自分の小学校一年生の時を振り返れば、ずいぶん劇的な変化が自分の中で起こっていたように思う。他の子供が、自分とは全く違う精神生活を送っているんだということに初めて思い至ったのもあの頃だった。自分は、家に帰ればあの父親とあの母親がいるが、Ａ君は家に帰るとぜんぜん違う親がいて、それがずっと続くのだとあるｃシュンカンに悟った。Ａ君が自分には全く見えない内面生活を送っているという事実自体を不思議に思ったことはもちろんだが、Ａ君とは幼稚園の頃からずっと遊んでいたのに、Ａ君の内面生活が自分の内面生活と違うものなのだということにその時初めて思い至ったことも、また不思議に思った。あのような私の心の動きも、私の親のあずかり知らぬことだったに違いない。私自身の子供の心の中で、今、どのような劇的な変化が起こっているのか、それも、また、私のあずかり知らぬことである。

［４］　そのような、②気がつけば当たり前のことに、ずっと気がつかないでいることができるという人間の心のあり方自体が、あの当時も、そして三十年近くの年月がｄタった今でも、不思議なことのように思われる。

［５］　この分では、まだまだ当たり前のことで気がついていないことがあるに違いない。

［６］　この世界は、お互いに絶対的にのぞき込むことのできない心を持った人と人とが行き交う「断絶」の世界である。世界全体を見渡す「［　　　　　］」などない。あるのは、それぞれの人にとっての「個人的世界」だけである。これらの「個人的世界」は、原理的に、絶対的に断絶している。その断絶の壁をｅコえて、私たちはかろうじて③か細い糸を結ぶ。その時、他者の心は、断絶の向こうにかろうじて見える仮想として立ち上がる。

［７］　私たち一人一人にとっての絶対与件は、世界が根本的に断絶しているということである。その断絶を何とか乗りこえて他者と行き交おうとする中で、私たちは他者の心という仮想を生み出す。

［８］　それが、私たち人間が生きるということなのである。

●語注

絶対与件＝議論の余地がないものと考えられている、事実や原理のこと。

■覚えておきたい語句

□１不可視…………………肉眼では見ることができないこと。

□１命題……………………真か偽かの判定の対象となる文。また、その内容。

□５カンガイ……………………身にしみて深く感じること。

□９劇的……………………非常に変化に富んでいる。ドラマチック。

□15あずかり知らぬ………かかわりを持たない。

□23仮想……………………仮に考えること。仮に想定すること。

【読みのセオリー】

★主張は具体例の前後にある

　評論は筆者の主張を述べた文章である。書き手は、読み手を説得しようと様々な具体例によってその主張を論証しようとする。

・問題提起

・具体例

・主張（結論）

という３点セットを意識して読むことが、評論では決定的に大事である。

◆漢字

　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①とは、何が「同じこと」だというのか。本文中の言葉を用いて、解答欄に続く形で三〇字以内で答えよ。（10点）

自分の親も、今の自分と同じように、

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

ということ。

問２　傍線部②とあるが、どんなことが「当たり前」だというのか、２〜３段落の中から四〇字以内で説明せよ。（10点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　本文中の空欄に入る最も適当な言葉を、次から選べ。（６点）

ア　心の視点　　イ　神の視点　　ウ　人の視点　　エ　親の視点　　オ　個の視点

〔　　　〕

問４　傍線部③とはどういうことか、これを言い換えている箇所を本文中から抜き出せ。（８点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　波線部について、「命題の切実さをしみじみ感じ」た筆者は、この「世界」がまずどのようなものであると考えたのか。解答欄に続く形で一〇字以内で答えよ。【読みのセオリー】（８点）

世界は〔　　　　　　　　　　　〕と考えた。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　本文の趣旨に合致しているものを、次から一つ選べ。（８点）

ア　子供は親の内面を知りはしないが、親は逆に、自分が子供の頃を思い出して、子供の心をある程度知ることができる。

イ　大人と子供の世界は「断絶」してしまっているので、大人は子供の世界を何としてでも「仮想」したがるのである。

ウ　人が自分の世界を生きるということは、気づけば当たり前で簡単なことを時間をかけて判っていくことに他ならない。

エ　私たちにとってもっとも大切なことは、他人の心の変化を知ることなどはできないのだ、という強い自覚だけである。

オ　人の心は、「仮想」としてしか我々の前に立ち上がってはこず、しかもそれはかろうじて見えてくるものである。

〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ動機　ｂ感慨　ｃ瞬間　ｄ経（った）　ｅ越（え）

問１　自分の子供の内面生活のことなど、何も判っていなかったのだ（28字）（傍線部がなければ５点減点）

問２　人は、たとえ肉親であっても他者の心の動きや変化を知ることなどできないということ。（40字）（傍線部がなければ３点減点）

問３　イ

問４　他者と行き交おうとする

問５　根本的（原理的・絶対的）に断絶している（10字）

問６　オ

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の意味をそれぞれ後から選べ。

98保証（　　）

99補償（　　）

100保障（　　）

101対象（　　）

102対称（　　）

103対照（　　）

104志向（　　）

105指向（　　）

ア　損害などを償うこと。

イ　責任を負うこと。

ウ　損なわれないように保つこと。

エ　シンメトリー

オ　コントラスト

カ　意識作用が向けられるもの。目標。相手。

キ　ある方向を目指して向かうこと。

ク　心を目的に向けること。

【解答】

98イ　99ア　100ウ　101カ　102エ　103オ　104ク　105キ

〔要　約〕　具体例は省略し、筆者の考察と結論を端的にまとめる。よって、［１］～［５］段落は要約には用いない。　　　　　　↓　人はお互いの心を決してのぞき見ることのできない「断絶」の世界の中で生きており、それを何とか乗り越えようとして他者の心を仮想し、人との関係を取り結ぼうとする。それが、人間が生きるということなのである。（99字）〈筆者＆出典〉茂木健一郎（もぎ・けんいちろう）一九六二（昭和37）年東京都生まれ。脳科学者。理学博士。東京大学理学部、法学部卒業。東京大学大学院理学系研究科物理学専攻課程修了。ソニーコンピューターサイエンス研究所シニアリサーチャー。専門は脳科学、認知科学。「クオリア」（感覚の持つ質感）をキーワードとして脳と心の関係を研究するとともに、文芸評論、美術評論にも取り組んでいる。本文は、『脳と仮想』（新潮社、二〇〇七年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊差し替え

問４　25行目「他者と行き交おうとする」を比喩的に言い換えている箇所を、本文中から抜き出せ。

［答］か細い糸を結ぶ

＊新問

問７　25行目「他者の心という仮想」について、筆者はどのような認識（意図）を持って「他者の心」を「仮想」と呼んだのか、その説明として最も適当なものを次から一つ選べ。

ア　私たちの持つ「個人的世界」などは、お互いに孤立しあってとても弱々しくもろいものではないか。

イ　「他者の心」などという、もともと存在しないものをあえて見るには想像する他ないではないか。

ウ　見えないものであったとしても、人は他人をなんとか理解して生きて行こうとするものではないか。

エ　「他者の心」は人間誰でも生きている内に見られるようになるとはとても言えないではないか。

オ　「他者の心」が見えないものならば、まだその存在が証明されたものとは言えないではないか。

［答］ウ

＊（語彙）追加

★１

⑧　ソウ像力がたくましい。（　　）

［答］⑧想

★２

⑧　心を（　　）わせる。

［答］⑧合

■要約の方法　★段落関係をつかむ

《本文を形式段落８段落に分けて考える》

［１］　人生を振り返ると、「他者の心は絶対不可視である」という命題を前提に世界を考えようと思ったのは、最近のことである。

［２］　子供を見て、自分も自分の親も子供の内面生活など何も判っていなかったと判り、簡単なことだが、そんなことほど判らないのではないかと思った。

［３］　自分が小学校の時、他の子供は自分とは全く違う内面生活を送っていることに思い至ったが、それは親も知らなかったのだから、同じように自分の子供の心の変化も、自分は全く判らない。

［４］　そんな当たり前のことに気づかない人間の心のあり方は、不思議である。

［５］　人間にはまだまだ気がついていない当たり前のことがあるに違いない。

［６］　この世界は絶対的に断絶していて、他者の心をのぞき込むことはできないが、人はそれを克服しようとして「他者の心」を仮想する。

［７］　私たちは断絶を何とか乗りこえて他者と行き交おうとする中で、他者の心を「仮想」するのだ。

［８］　それが人間が生きるということなのである。

　　　　　↓

《この中で（体験的）具体例は省略し、結論だけをまとめる。したがって［２］、［３］、［４］、［５］段落は、要約には用いない》

　　　　　↓

■本文の要約■

人はお互いの心を決してのぞき込むことのできない「断絶」の世界で生きている。私たちは、その断絶を何とか乗りこえようとして他者の心を「仮想」し、人との関係を結ぼうとする。それが人間が生きるということである。（101字）